

学校の枠、  
国の枠を超えて  
子どもを育てる  
新たな挑戦

第6回

取材／市川理香・田実久美  
文／市川理香

Double Helix (DH)

Double Helix は「二重らせん」のこと。「知識の獲得」と「高次の思考力の向上」は、二重らせんのように強く結びついているという理念を、プログラム名に込めています。講師には、各々専門分野で活躍する第一人者をイギリスから招聘しています（2023DHIO はスペインからも）。

“I love your mistake.”

DH シリーズ参加校のうち首都圏外から参加しているのは、スタート時から参加の南山中学校・高等学校女子部（愛知県名古屋市。以下、南山女子部）、2023年夏 DHTM 参加の四天王寺中学校・高等学校（大阪府大阪市）。貴重な夏休みに「わざわざ東京まで何を求めて?」。そんな素朴な質問に丁寧に答えてくれたのは、昨夏の DHTM (Double Helix: Translational Medicine)、DHIO (Double Helix : Ichikawa × Ohyu) に参加した南山女子部の高校2年生です。

柴崎美有さん (DHTMに参加。以下、柴崎さん) :

中学2年の時からのコロナ禍で、行事や研修などが制限されて、なかなか外に出る機会がありませんでした。コロナが明けると友人はいろいろなプログラムに参加して自分も思ったのですが、県内で参加できるプログラムは募集が締め切られていて、焦ってしまいました。そんな時、両親から DH を勧められたんです。もともと、県外のプログラムに参加したいという気持ちもあったので、東京に行きたいと思いました。祖父母が医療関係者だったので、医療に関心もありました。

藤井怜奈さん (DHIOに参加。以下、藤井さん) :

学校の授業などでも生徒同士の意見交換はありますが、似た環境の集団なので、意見が似通ってしまいがちだと感じました。普段、関わりがない他校の生徒たちと交流ができることに魅力を感じました。

全プログラムが英語で行われ、講師の専門分野の深い知識をシャワーのように浴びます。さらに、「あなたはどう思う?」と常に問いかけられるのが DH。まるで思考の森に分け入るような日々。期間中、どのように過ごしたのでしょうか。

柴崎さん：どちらかという受験英語中心に勉強してきたので英語に苦手意識を持っていました。共学校に通う生徒や、違う地域に住む他校の生徒と話したい気持ちが強かったのに、最初は意見交換もなかなかできなくて。英語で医療専門用語が飛び交っていたので理解するのも大変でした。でも、ナディア先生がオリエンテーションの時間に言ってくださった、「I love your mistake.」という言葉が心に刺さって、失敗を恐れずに発言しようという気持ちになれました。自分の意見を言うだけでなく相手から聞くのも大事なので、リアクションをして、自分にもリアクションが返ってくる、そんな



Double Helix:  
大人を熱くする生徒

授業でした。問いが難しすぎて意見を出せない時、先生が違う見方を提示してくれたのも勉強になりました。

藤井さん：私も英語に自信はありませんでしたが、実力を顧みず参加。高1のディスカッションの授業があってよかったと実感できました。私は自分から意見をいう方ではなく、初日は、自分の考えが合っているのか自信がなくて黙っていました。でも周りの人も同じようにもじもじしていて、このまま誰も言わないと面白くないなと思って発言してみたら理解度も高まって、自分の意見を言葉にして言うことが大事だと思いました。

柴崎さん：選択を迫られる場面で白黒つけられない問いを考えた、ナディア先生の医療倫理の授業は印象的でした。妊婦さんは帝王切開をしたくない。でも帝王切開をしないと母子ともに助けられない…。どちらかに決められた人も決められなかった人もいました。ナディア先生からは、選ぶことは間違えることではないのだから、自分の考えを持つことが大事だと教わりました。また、陽輔先生のジェンダーバイアスの授業も心に残っています。授業の振り返りや課題をこなすのも楽しすぎて、毎日3時間睡眠でした。

藤井さん：教養系プログラムのなかでもエリッサ先生の生物の授業がおもしろかったです。学校の授業ではやらないようなエピゲノムの内容に感動してしまいました。内容は難しかったので、授業前にみんなで話をしてから授業に臨むようにしました。

また普段は同世代の男子との交流はないので、男女で見え

前回まで、主に大人(講師や運営側)の視点から2023年のDHシリーズをお伝えしてきました。では、参加した生徒は、このプログラムから何を受け取り、どう感じているのでしょうか。

P.52 写真：柴崎さん(右)、藤井さん(左)  
P.53 写真：2023DHTM。集鴨学園提供

方が違うことも感じましたし、鋭い質問を突っ込んでくるので勉強になりました。ネイティブの先生による高度な内容の授業を理解するために、ホテルで単語を調べて復習する毎日。それぞれの教科が独立していたので、それぞれを理解するのに時間がかかりましたが、いずれも興味深い内容で、知識を得られることがうれしかったです。それがモチベーションになりました。

ものの見方や考え方が広がった

5日間のプログラムを終え帰宅し最初に発した言葉は、何と「帰りたい」だったと口を揃えます。知識を得ること、考えることの楽しさを実感したことが伺えます。DH後に、その気持ちは、学校生活にどんな変化をもたらしたのでしょうか。

柴崎さん：勉強のモチベーションが上がって、知っていることも、さらに深いところまで調べようと思うようになりました。また、いろいろなプログラムに参加してみようという気持ちも湧いて、大学が主催するオンライン講座にも参加しました。

DHTMで医療について深く知ることができ、医療の分野への興味も高まりました。今後もっと広い分野を知っていきたいと思っています。

藤井さん：DHに参加して、自分はまだまだ知らないことが多くあることを知りました。例えば、チャーリー先生の地理の授業で移民問題について学んだのですが、受け入れるのも受け入れないのもバランスが取れないと成り立たないという

点に興味が高まりました。

医療の進路を考えていてTMに参加したかったけれどもも部活があって行けなくてIOに参加したのですが、医療だけにとられる必要もないなと思いました。幅広く知識をつけることが世界を知ることにつながるし、医療につながることもあるし、物事の見方や考え方を多角的にしてくれる。おもしろいですね。

柴崎さん：5人の講師が、モチベーションカーブという時間にご自分の人生について語っていただきました。受験に失敗しても挑戦し続けたり、国境なき医師団で劣悪な環境でも人命を助けるために努力したりしている姿に感銘を受けました。

授業では、医療に特化するのではなく、公平性と平等性の違いとか、チームワークの大切さだとか、一見医療に関係ないと思えるような知識も必要だとわかり、自分を一段階、成長させてくれたと思います。

藤井さん：参加するかしないかで迷っているなら、とりあえず挑戦した方がいいと言ってあげたいです。英語に自信を持っていただけではありませんが、知識を得るだけでなく、毎日考えることで自分自身の成長もあったと思います。

学校の枠を超えた関係ができたのもよかったです。東京から名古屋に会いに来てくれる話もあります。

生徒を信じる

南山女子部の中島正喜先生に、「DHに向かない人っていますか?」と聞くと、少し考えて、「学ぼうとしない人。このままでいいという人」と答えてくれました。

中島先生は二人の話を聞きながら、「自分を肯定する自信を持たたのではないかと感じたと言います。DHシリーズ参加校の先生方が、「南山女子部の生徒には気をつける」と冗談めかして言うそうです。何しろ授業が終わると質問に行くと、なかなか講師を解放しないので。

また、DHシリーズに参加することで、「生徒の限界を決めずに、生徒を信じて、もっと多様な経験をさせてあげたいと思うようになりました。また、自分が生徒だったら、どんな授業を受けたいかを考え直す機会となりました」と、自分自身の変化に気づいたそう。そして、参加校の先生の声かけ一つとっても勉強になるし、取り組みの意図を聞いて、これまで自分がやってきたことがそれで良かったと思うこともあるし、参考にすることもあり、学び続ける気持ちが湧いてくると語ります。

もし、DHを他の学校の先生に薦めるとしたら? 「生徒の可能性を広げてみませんか。他校の生徒と意見交換をして視野を広げたり、思考を深めたりする生徒の成長を、その場で見守りませんか」(中島先生)

「学校の枠、国の枠を超えて子どもは成長する」ことを示すDHは、2024年も挑戦が続きます。